小池平遺跡発掘調査報告書

茨城県行方郡玉造町八木蒔

2003年12月

玉造町遺跡調査会
玉造町教育委員会

序

茨城県の南部に広がる湖、霞ヶ浦に面している玉造町は、町中央部を梶無川が流れ、北西には鎌田川があり、小川町と町境をなしています。古くから農業で発展した地域で今でも行方台地では畑作を、沖積低地では稲作やイチゴ栽培が盛んに行われています。

これらの台地には、考古学上貴重な遺跡や遺物が眠っており、原始古代から現在に至る人々の営みを知る重要な歴史的文化遺産となっています。

今回の調査は、当該遺跡内を通る町道１０号線の拡幅が計画され、文化財保護の観点から十分に協議を重ねた結果、計画変更は困難であることから、遺跡の記録保存を目的に実施されました。平成５年の町道２，４２７号線改良工事に伴う緊急調査に続き、当時の集落や境界等の一端を知ることができました。調査が工事にかかる道路拡幅部分ということもあり、遺跡の全体像は掴めませんでしたが、当遺跡の保護保存に力を注ぎ、玉造地方の歴史文化の研究と伝統文化の継承に努力していく考えです。

調査に際しましては、玉造町建設課、地元地権者の方々のご理解をいただくとともに、全面的なご支援を賜り無事に終了することができました。また、調査の担当をしてくださいました汀安衛先生はじめ調査協力者には心より敬意を表し、この報告書が郷土をより深く知る上で、広く一般の方々にもご活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、ご指導賜りました茨城県教育庁文化課、鹿行教育事務所、地元の関係各位の深いご理解とご協力を賜りましたことに厚く感謝を申し上げ、ご挨拶といたします。

平成１５年１２月

玉造町遺跡調査会
玉造町教育委員会教育長
大崎博之

例　　言

1　本報告書は、茨城県行方郡玉造町八木蒔小池平１０１３－３番地他に位置する小池平遺跡の調査報告書である。

2　本調査は、町道１０号線の拡幅改良工事に伴う発掘調査で、対象面積は約９００㎡。

3　発掘調査は平成１５年５月１４日から３１日まで行い、その後整理を開始した。

4　調査部分は、以前から農地として使用されており耕作土下には、戦後の溝、甘藷の貯蔵穴等多くの攪乱が見られた。

5　調査会組織

会　長	大﨑　博之	(玉造町教育委員会教育長)
副会長	風間　亨夫	(玉造町文化財保護審議会会長)
理　事	宮崎　幸男	(玉造町文化財保護審議会委員)
	鈴木　亮然	(玉造町文化財保護審議会委員)
	八木　操	(玉造町文化財保護審議会委員)
	笹目　吉久	(玉造町文化財保護審議会委員)
	田宮　みつ	(玉造町文化財保護審議会委員)
	小沼　政雄	(玉造町文化財保護審議会委員)
	堀田　好男	(玉造町文化財保護審議会委員)
	汀　　安衛	(鹿行文化研究所代表　調査主任)
監　事	田山　信男	(玉造町文化財保護審議会委員)
	大場　浩一	(玉造町文化財保護審議会委員)
事務局	重田　順爾	(玉造町教育委員会生涯学習課長)
	中田美代子	(玉造町教育委員会生涯学習課社会教育係長)
	森作　知代	(玉造町教育委員会生涯学習課社会教育主事)
	磯山　智也	(玉造町教育委員会生涯学習課主事)

凡　　例

1　本報告書の縮尺は図中に表示したが、原則として１／３０、１／１０とした。水糸レベルは図中に表示した。

2　本報告文・写真・遺物実測は汀安衛、図面は西田和子、遺物整理は徳利初代が行い、汀安衛が総括した。

3　本調査にあたり次の方々に協力をうけましたので、これを記して感謝の意を表したい。
茨城県教育庁文化課、玉造町建設課、玉造町教育委員会、玉造町中央公民館、小田俊男、徳利初代、横田泰隆、橋本光枝、西田和子、行方地方広域シルバー人材センター、須貝勇、平間鉄男、飯田貞夫、里村滋紀、松本秀子、柳瀬秀夫
（地元関係者）八木蒔区長　千ケ崎武男、千ケ崎正英
（表 土 除 去）橘川英治

抄　　録

ふりがな	こいけだいらいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	小池平遺跡発掘調査報告書
発行者名	玉造町教育委員会、玉造町遺跡調査会
所　在　地	〒311-3511　茨城県行方郡玉造町乙 1179
編集者名	汀　安衛
編集機関	鹿行文化研究所
所　在　地	〒311-2211　茨城県鹿嶋市青塚 718
発行年月日	2003 年 12 月 25 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
小池平遺跡	茨城県 行方郡 玉造町八木蒔 1013-3 他	08425	075	36° 7′ 45″	140° 24′ 15″	20030514 20030531	900 ㎡	町道 10 号線改良工事に伴う調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小池平遺跡	集落跡	奈良時代末から平安時代初頭	住居跡、溝、土坑	土師器甕、坏、須恵器坏、盤、支脚	

目　　次

序　文
例　言
凡　例
目　次
図　版　目　次
Ⅰ　遺跡の位置と史的環境
Ⅱ　調査に至る経過
　1　調査に至る経緯
　2　調査日誌
Ⅲ　調査の概要
Ⅳ　遺構と遺物
　1　1号住居跡
　2　2号住居跡
　3　3号住居跡
　4　4号住居跡
　5　6号住居跡
　7　7，8号住居跡
　8　9号住居跡
　9　10，11，12，13号住居跡
Ⅴ　土坑
　1　1号土坑
　2　2号土坑
　3　3号土坑
　4　4号土坑
Ⅵ　溝
　1　1号溝
　2　2，3号溝
　3　4号溝状遺構
Ⅶ　総括

挿　図　目　次

第　１図　小池平遺跡位置図と周辺遺跡
第　２図　調査区と遺構位置図
第　３図　１号住居跡と出土遺物実測図
第　４図　２号住居跡実測図
第　５図　３号住居跡と出土遺物実測図
第　６図　４号住居跡と出土遺物実測図
第　７図　６号住居跡と出土遺物実測図
第　８図　７，８号住居跡と出土遺物実測図
第　９図　９号住居跡と出土遺物実測図
第１０図　１０，１１，１２，１３号住居跡と出土遺物実測図
第１１図　１，２，３，４号土坑実測図
第１２図　１，２，３，４号溝，溝状遺構実測図

図　版　目　次

ＰＬ　１　調査前の状態左上、確認時右上、中左、１号住居跡遺物出土状態
１号住居跡完掘
ＰＬ　２　２号住居跡完掘右上、３号住居跡確認と１号溝中左、遺物出土状態中右と完掘
ＰＬ　３　４号住居跡土層、遺物出土状態、完掘　６号住居跡遺物出土状態、完掘
ＰＬ　４　７，８号住居跡完掘遠景、７号住居跡土層、完掘、８号住居跡遺物出土状態、９号住居跡調査光景、同遺物出土状態
ＰＬ　５　９号住居跡遺物出土状態、完掘、１０号住居跡完掘、１１号住居跡完掘、１２号住居跡完掘、１３号住居跡完掘
ＰＬ　６　１号溝層序、２，３号溝遠景、４号溝道状遺構？２，３号土坑
ＰＬ　７　１，２，３，４号住居跡出土遺物
ＰＬ　８　５，６，７，９号住居跡出土遺物
ＰＬ　９　１０，１１，１２，１３号住居跡出土遺物

Ⅰ　遺跡の位置と史的環境（第１図）

本遺跡は、茨城県行方郡玉造町八木蒔１１８７－１番地他に所在する。玉造町は茨城県の中央部やや東寄りに位置している。玉造町は、西側は霞ケ浦（西浦）に面し南側は麻生町、東側は台地中央部で北浦，鉾田両町に接し北側は、鎌田川を挟んで東茨城郡小川町と堺を接している。町域は全体的に台形状を呈する。

本遺跡は、分布調査から西浦と梶無川に挟まれた半島状台地中央部に占地していると思われる。中心は台地中央部、平坦面に近いところに所在すると思考される。遺跡の占地する台地には縄文時代後期の八木蒔貝塚①が近く、古墳時代の捻木遺跡、中世の塙館跡など縄文時代から近世までの多くの遺跡が確認され、残されている。

縄文時代の貝塚では中期阿玉台式~加曾利Ｅ式主体のオチャク内貝塚、古墳では捻木古墳群、城館址では塙館跡、芹沢城跡、山中館跡、玉造城跡等が残され梶無川と西浦に挟まれた台地は、古代から生活環境に恵まれた地域であることが窺われる。

小池平遺跡は、台地中央部に位置し、標高３０ｍ程を測り、ほぼ平坦に近い部分に占地している。前回の調査では台地端では確認されず（注１）今回の調査区近くから６軒ほどの住居跡が検出されている。

（注１）平成４年山武考古学研究所によって調査され奈良末から平安初頭の住居跡が検出されている

第１図　小池平遺跡位置図と周辺遺跡

Ⅱ　調査に至る経過

1　調査に至る経緯

玉造町建設課から、町道１０号線改良工事に先立ち平成１４年４月２６日付けで、玉造町教育委員会に工事予定地内における埋蔵文化財の有無の照会があった。教育委員会は道路予定地内に周知の遺跡「小池平遺跡」が所在し、遺跡部分の工事をする場合には発掘調査による記録保存が必要な旨平成１４年５月１４日付けで回答した。平成１５年３月２７日に確認調査を行った結果、道路予定地内に奈良時代～平安時代にかけての遺構が確認された。玉造町教育委員会は文化財保護の立場から、その保護と取り扱いについて茨城県教育庁文化課の指導の下、町建設課と協議を重ねたが、計画変更は困難であることから記録保存の措置を講じることとなった。

発掘調査にあたっては、鹿行文化研究所の汀安衛氏の協力を得て、平成１５年５月１４日から５月３１日の期間で調査を実施することになり、期間内に終了した。

2　調査日誌

調査は、既存の道路改良拡幅工事の為現道の両側に２m乃至４m程拡幅される。道路の両側に付随した調査区域であり調査には交通、残土置き場等多くの課題があった。

以下、調査過程を日誌から抜粋し述べる。

５月１４日　前年度の試掘、確認調査に従って道路北側から耕作土を重機で排土、遺構確認作業に入る。１号土坑、１号住居跡確認、午後から調査を開始する。

１６日　重機により耕作土除去、調査続行２号住居跡、２号土坑調査開始。

１７日　１号住居跡出土遺物実測し取り上げ。２号住居跡調査、遺物少ない。

２０日　シルバー人材センターより人手を確保。２号住居跡土層、平面図作図。

２１日　２号住居跡ピット調査。３，４号住居跡土層作図。

２２日　２号住居跡平面図。３号住居跡平面図作成。４号住居跡平面図作成。７，８号住居跡調査開始。

２３日　７，８号住居跡調査、土層作図、平面図作図。９号住居跡調査開始。
９号住居跡は電柱の支柱が有り、調査にかなりの制約を受ける。

５月２７日　９号住居跡調査、大型の住居跡。４号溝、道調査。

２８日　６号住居跡調査、５号住居跡は竈のみ。１０，１２，１３住居跡調査開始
９号住居跡遺物平面図、土層図作成。

２９日　１１，１２，１３号住居跡調査。５，６，９号住居跡竈調査。

３０日　１２，１３号住居跡平面図作成。

３１日　１号住居跡の平面図、断面図、４，１１号竈精査。本日ですべての作業を終了とする。遺構はかなりの数を確認、調査したが総べて一部、もしくは大半がエリア外に位置し全掘出来たものは２号住居跡のみであった。

Ⅲ　調査の概要（第２図）

調査は、既に調査日誌で述べたとおり遺構の大半、又は一部をエリア外に位置していた。確認調査時は農作物の関係で全域の確認は出来なかった。

よって本調査では、遺構の数は予想を上回る数になった。町道改良、拡幅工事の為の調査であるため宿命的なことに調査区は、現道の両側に最高４m、最低１mと極端な制約のもとでの調査になった。

また農作物の関係で残土置場の場所の設定にも制約があった。

確認調査の時点と、調査時の遺構の有無を確認し、土置場を確保した。

以上のような状態での調査になった。

遺構の大半は住居跡で、都合１３軒、土坑４基、溝３条、道状遺構１が検出された。

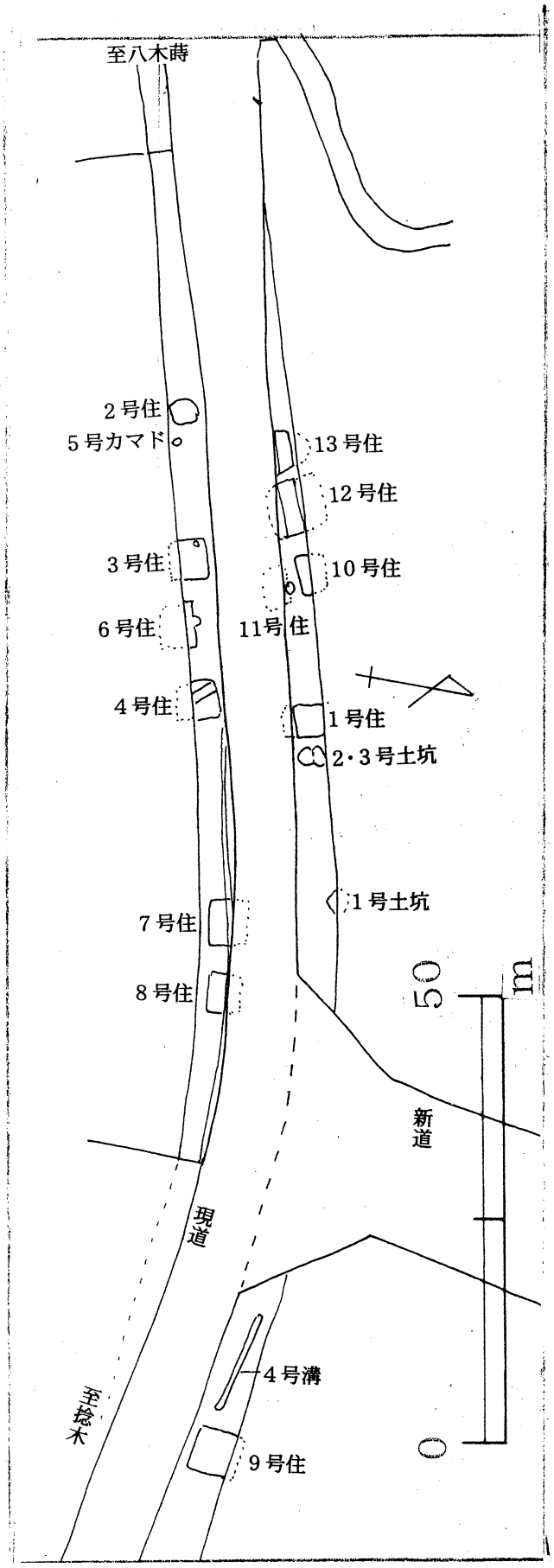
検出された住居跡は、北側に竈を有するものと無いもの、北から東に造り変えたもの等が見られた。

いずれも調査区範囲での状態である。全掘出来たなら確定的なことも言えるが大半を調査区外に位置する遺構群が大部分であった為確定的な事は断言出来ない。

溝、道路状遺構としたのは前回の山武考古学研究所が調査した時の遺構と同一のもので調査時点では溝として捉えたが、「道」とは断定しかねた。よって本報告書では溝とした。

（平成４年の調査報告書）

（遺構の位置関係は道路が東西方向に走行しているので道路南側、北側と表現した）



第２図　調査区と遺構位置図

Ⅳ　遺構と遺物

１　１号住居跡（第３図）

本住居跡は、道路北側に位置し検出された。上部は畑地のため攪乱を受けている。主軸をＮ－３０°－Wに置き、東西方向で３.８ｍを測る方形プランを呈すると思われる。南側は調査区外になり全容は把握出来ない。

掘り込み深さは５０～６０ｃｍで垂直な掘り込みが見られ、西側には周溝が認められた。

覆土は、レンズ状の自然堆積を示し８層に分けられた。いずれも暗褐色、褐色で白色の粘土、焼土、砂質粘土等の混入の差であり、粘性、締まりはややある。層序から本跡は竈の構築と合わせ建て替えが推定できる。

竈は、北壁と東壁に見られたが北側の竈は削りとられ僅かに遺構外側の部分に砂質粘土と煙道状の焼土が見られたが攪乱、崩壊が激しく明確には捉えられなかった。東側の竈は住居跡の廃棄まで使用されたものであるが袖部は取って付けた感じの粗雑な作りであった。竈袖、煙道部から３，４の須恵器坏が出土している。補強材的な状態の出土。

床面は前述の様に凹凸が見られた。東側の竈前面は良好な締まりが見られ、良く踏み固められていたが、その他はやや悪く、柱穴は検出できなかった。

遺物は投げ込み的に２層から小破片がかなり出土したが完形品は皆無でいずれも復元により六割前後から九割前後になったもので、ほぼ器形と形態が把握できる。

出土土器は、土師器、須恵器であり須恵器の割合が多い。図示した１，２は高台付き、３，４，５は平底で６，７は土師器小型甕である。高台は直立気味の１と「ハ」の字状に弱く開き、長めで器形からは皿状、盤状に近い。体部は直線的に開く１と器肉を減じながら開き口唇部を丸く治める３，４とカット気味の５がある。１，３は土師器で１は内黒。

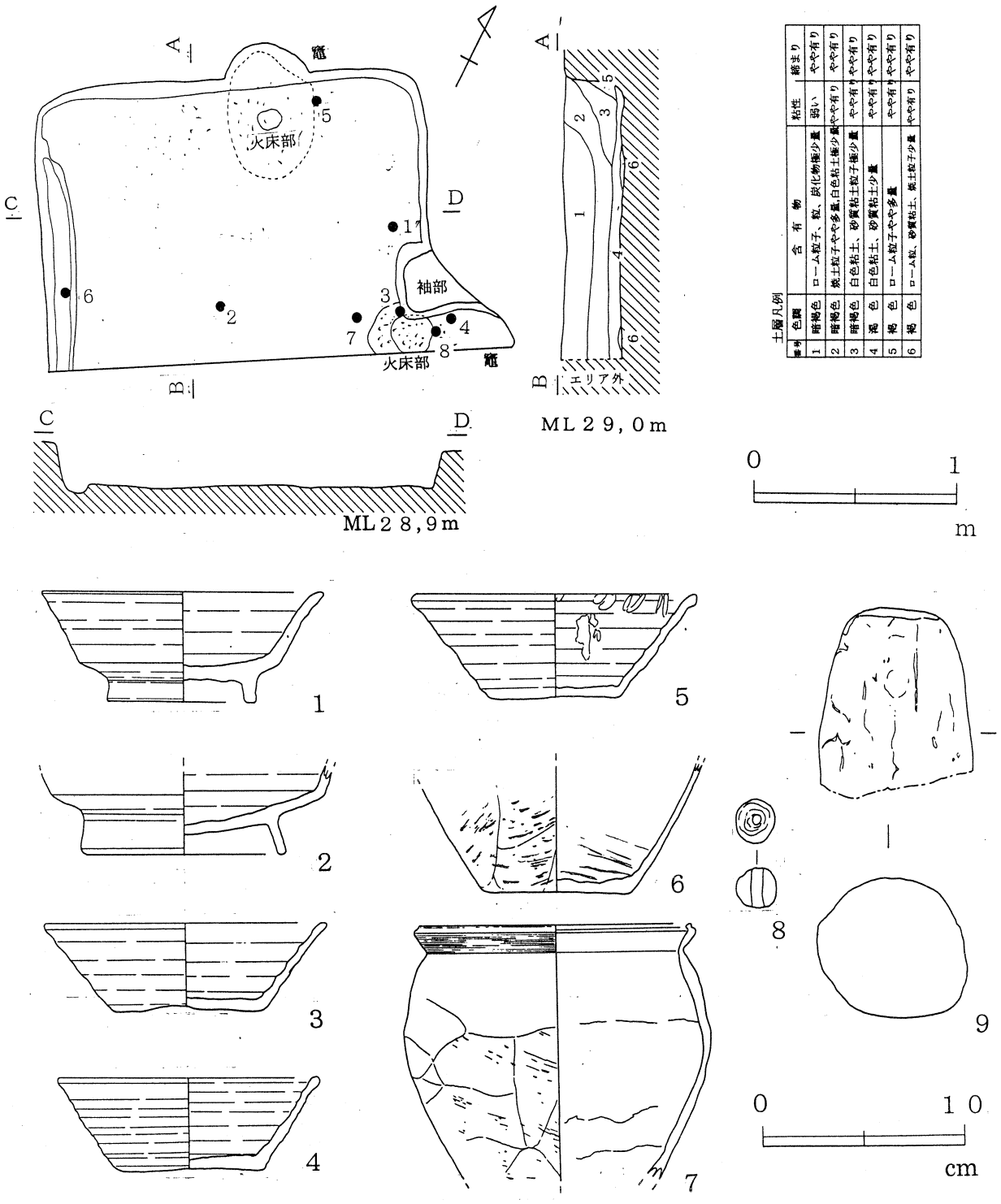
成形は総べて轆轤で成形痕を残している。底部はヘラ削り調整がなされている。口径１４～１５ｃｍ、高さは４.５～５ｃｍとほぼ均一している。胎土には雲母、長石、細石を多量に含むものと少ないものの二種類が見られた。

甕は、器肉が２～４ｍｍ前後と薄く器面は粗雑なヘラケズリ調整がなされている。胎土は長石、細石を多量に含む。器形は平底から内湾気味に立ち上がり、頚部は（く）字状で口唇部は丸く収め、内傾気味を呈する。７，８は器肉の薄い小型の甕で粗いナデ、ヘラケズリ調整がなされ長胴形を呈する。口唇部は内側に短く内傾する。

９は、土製支脚で１点欠失したものが見られた。西壁側の周溝から出土している。やや丸みを持ち、下部を欠失しているが三角形状形態と思われる。本住居跡の前段階の時期か、時間的な差が見られる。

その他、東側の竈上から土製丸玉が１点出土している。重さ８ｇ。

出土遺物からは奈良時代末に１期目の住居跡が作られ、東竈の２期は平安時代初頭に位置づけられる。本住居跡は２つの時期に分けられる。



第３図　１号住居跡と出土遺物実測図

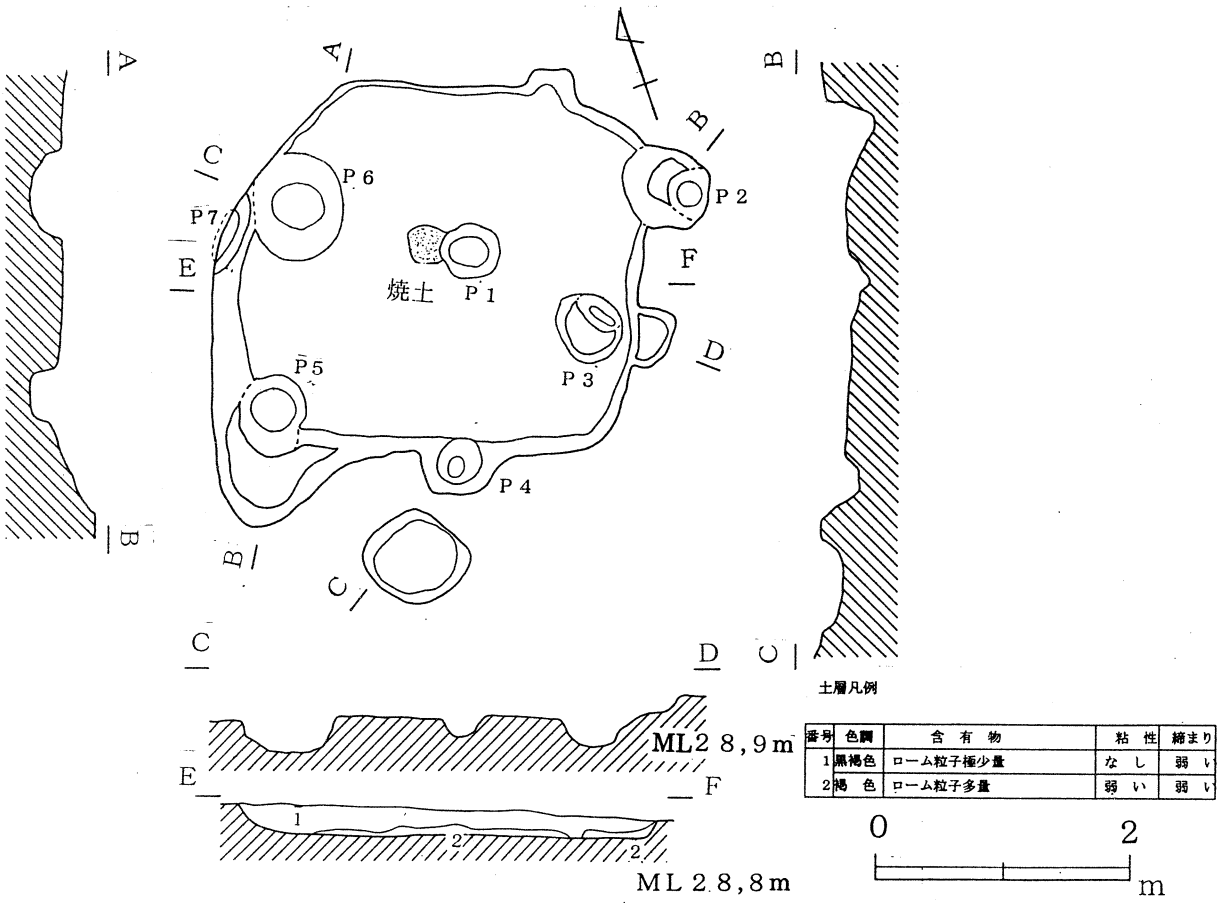
2　2号住居跡（第４図）

本住居跡は、道路南側の調査区、最も西南に位置して検出された。主軸はN－２９°－Eに置く。東西３.２m、南北２.５mを測る長方形状プランを呈する。一応住居跡とし後述べする。

覆土は、２層に分けられたがそれ程の差異は見られない。確認面は黒褐色で、掘り込みは３０ｃm程と浅い。床面は東側に僅かに傾斜を示している。

中央部に焼土が見られ、床面は僅かに赤褐色に変化していたが所謂「炉」の感覚はなく、掘り込み認められない。周辺からは合計７基のピットが見られ規模、プラン、掘り込み深さは等は一定しない。いずれも径３０ｃmから７０ｃm程の円形状プランを呈し掘り込みは２０～３０ｃmと浅い。中央にも２０ｃm程の小穴が位置している。いずれのピットも位置的に柱穴とは推察出来ず、変則的な掘り方である。覆土は２層、自然堆積状態で黒褐色、褐色で締まり、粘性は弱い。

遺物も総数３５片と少なく土師器細片が大部分で、図示出来るものは無かった。遺物から判断して近隣の住居跡と時期的には差異はないと思える。時期、使用目的の判断に躊躇する遺構である。



第４図　２号住居跡実測図

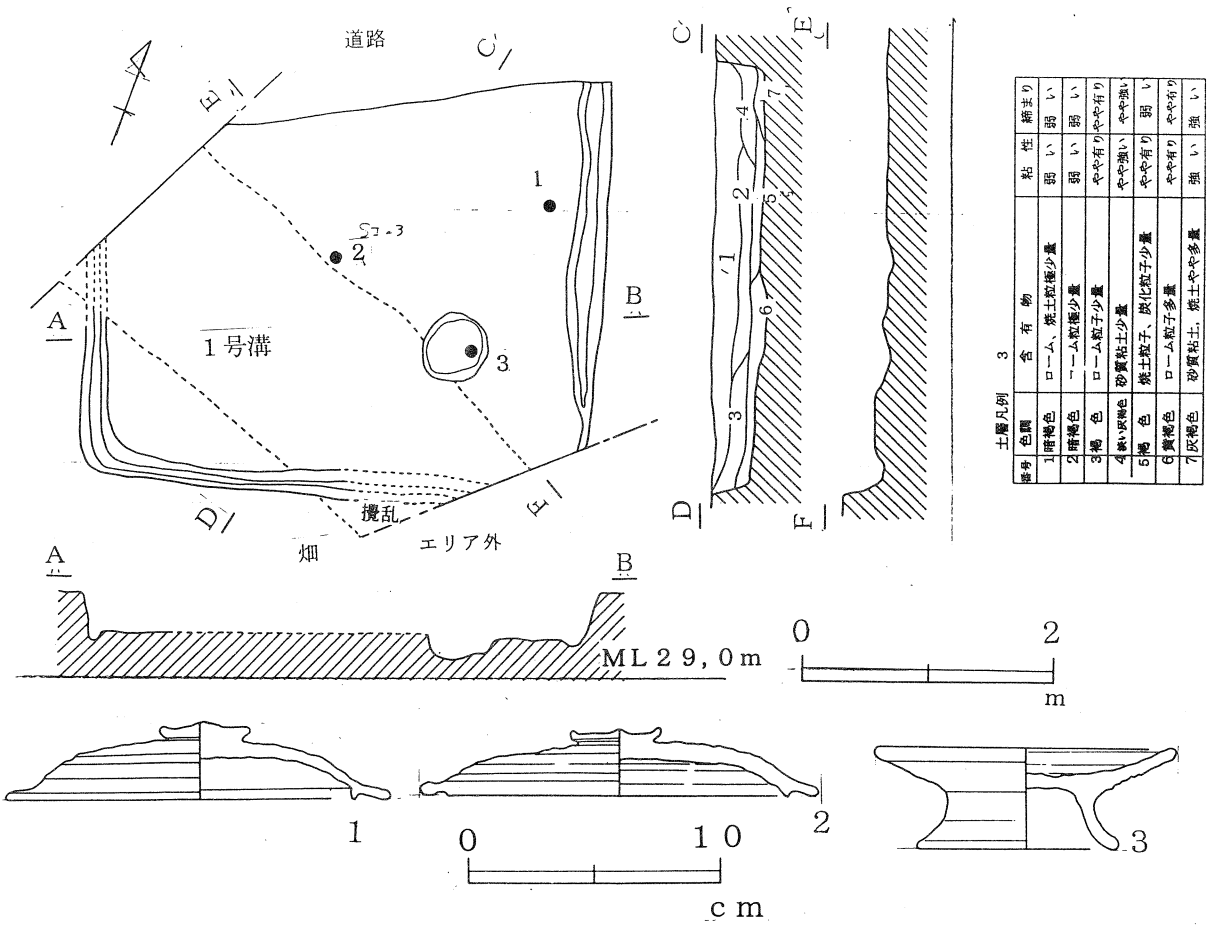
3　3号住居跡（第5図）

本住居跡は、2号住居跡の東側に位置し１０m程離れて検出された。北側と南側の一部を調査区外に置く。主軸をN－１８°－Wに置き、東西４.１mを測る。南北方向は道路部分が未掘のため竈も不明。遺構中の西南部に斜めに１号溝が掘り込まれて攪乱を受けている。掘り込み深さは３０cm程で、立ち上がりは弱く傾斜を示す。周溝はやや深めで幅広である。

覆土は、７層に分かれるが埋積状態、層序からは自然埋積と理解される。確認面と２層は暗褐色で３層から褐色底部に粘土塊、面があった。上部は締まり、粘性は弱い。下部はややある。竈は、北側が道路の為未掘、不明である。出土遺物から北壁に持つと思われる。

床面は、溝で攪乱されている以外はやや締まりを持つ。一部に甘藷貯蔵穴の攪乱部がある。

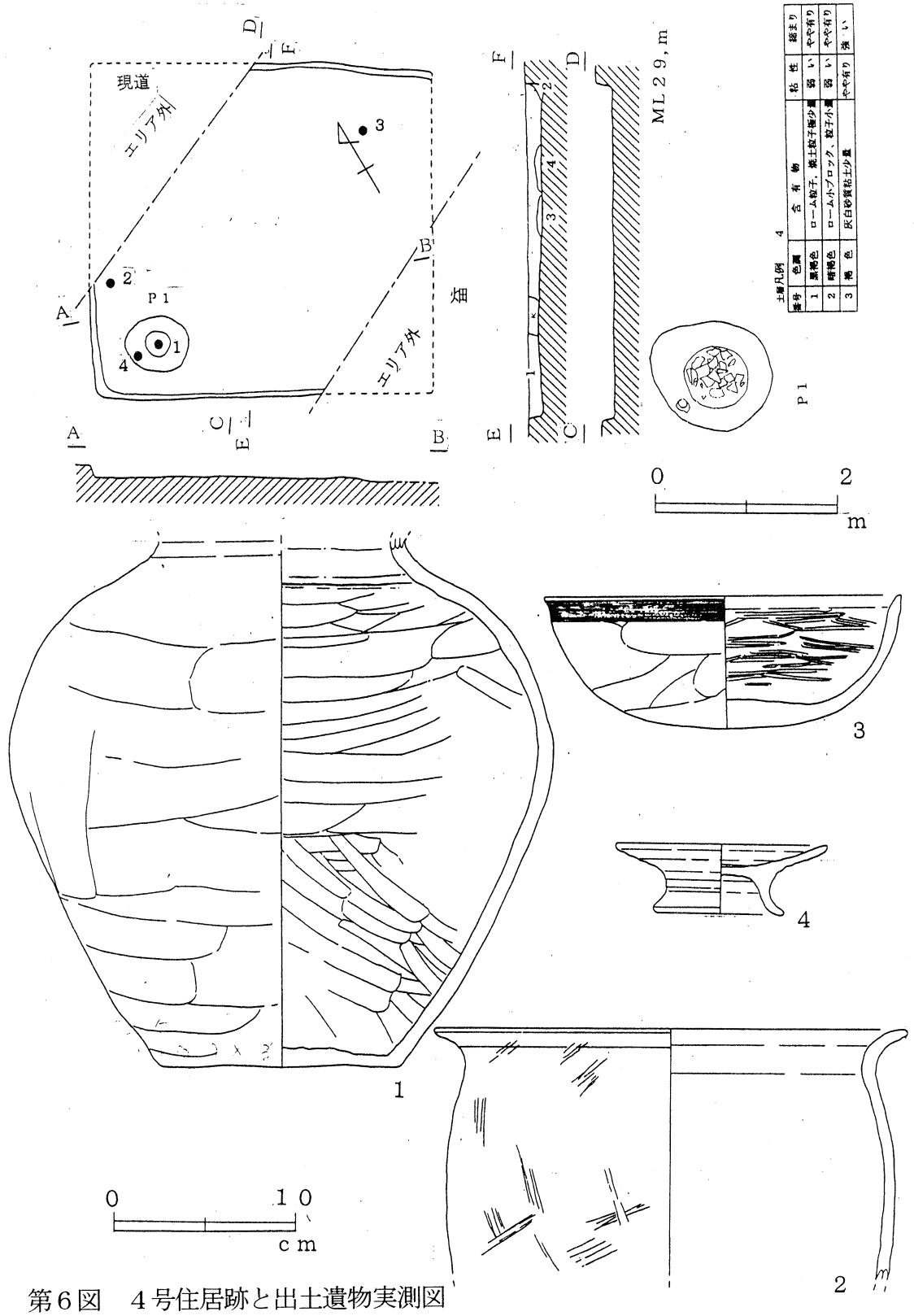
遺物は少なく器形の判る物に土師器破片と須恵器蓋、台付き皿が出土している。図示した１，２はカエリ、宝珠摘み、膨らみが対照的である。１は全体に膨らみを持ち、天井部に宝珠形摘みをもちカエリはやや丸みを持つ。端部は丸く長く伸びる１と、カエリが三角形状で端部は短く膨らみも弱く摘みも扁平な２がある。３の皿は高台が長く「ハ」の字状に開く。轆轤成形、ナデ調整で口径１２cm。本住居跡の年代は２の須恵器の時期が推察される。総じて遺物は少ない。３は土師器である。



第５図　３号住居跡出土遺物実測図

４　４，５号住居跡（第６図）

本住居跡は、３号住居跡の東側１０ｍに位置して検出された。北西隅部と東南隅部をそれぞれ道路、畑地の調査区外に置き全体プランは不明である。調査範囲で推測すれば主軸をＮ－２９°



第６図　４号住居跡と出土遺物実測図

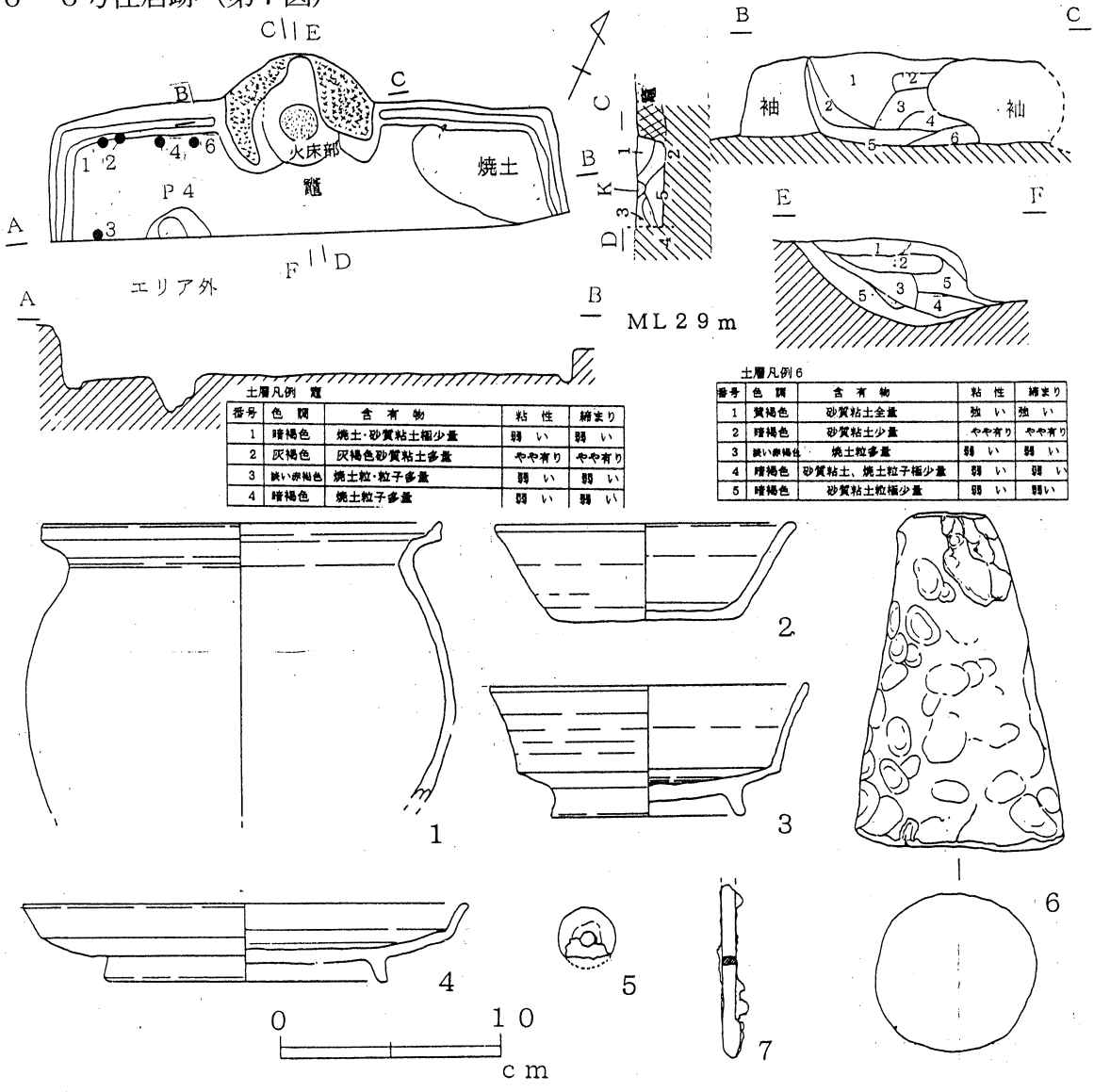
－Ｅに置き、推定で東西南北３.７ｍ前後の方形プランを呈する住居跡と思われる。掘り込み深さは１５ｃｍから２０ｃｍと浅く壁面立ち上がりは緩く開く。東南隅部は近世の攪乱、その他牛蒡のトレンチャーが入っていた。覆土は、３層に分けられ確認面では黒褐色で床面近くに灰褐色の粘土が見られた。１，２層とも粘性、締まりは弱い。３層はややある。層序から自然埋積の可能性が強い。竈は出土遺物から北壁に存在すると思われるが、未掘のため不明である。

床面は総じて締まりは良く、平坦である。緩く北側に傾斜を示す。

遺物は少なくピット内出土の甕を除けば、総数で５７片を数えるのみである。１は長胴形の甕で口縁部、胴部の一部であり頚部は「く」の字状を呈し開き、器肉は薄い。内外とも粗雑なナデ調整が施されている。２はピット内部から出土した台付き皿で口径１１.７ｃｍ轆轤成形である。１と３とでは時期に差が見られる。３は大型の碗状坏でやや古い時期で本跡の時期とはやや差が見られる。１，２が本跡の時期の遺物と考えられる。平安時代初頭か。

５号住居跡は２号住居跡の東側３ｍに検出された竈のみの住居跡で、すべてを畑、エリア外に位置していた。遺物も皆無であるが周辺の遺構と大差は無いと思われる。

６　６号住居跡（第７図）



番号	色　調	含　有　物	粘　性	締まり
1	暗褐色	焼土・砂質粘土極少量	弱　い	弱　い
2	灰褐色	灰褐色砂質粘土多量	やや有り	やや有り
3	淡い赤褐色	焼土粒・粒子多量	弱　い	弱　い
4	暗褐色	焼土粒子多量	弱　い	弱　い

番号	色　調	含　有　物	粘　性	締まり
1	賀褐色	砂質粘土全量	強　い	強　い
2	暗褐色	砂質粘土少量	やや有り	やや有り
3	淡い赤褐色	焼土粒多量	弱　い	弱　い
4	暗褐色	砂質粘土、焼土粒子極少量	弱　い	弱　い
5	暗褐色	砂質粘土粒極少量	弱　い	弱い

第７図　　６号住居跡と出土遺物実測図

本住居跡は3，4号住居跡の間に検出された住居跡でエリアぎりぎりまで調査した。よって竈，柱穴等が確認できた。主軸をN－24°－Wに置き東西4.6m南北は不明であるが東西同様な規模と推察され、方形プランの住居跡と思われる。掘り込みは20cm程で浅く、壁面は垂直に近い掘り込み。竈を北壁中央に置く。調査は全体の1／4前後であろう。

覆土は、5層に分類されたが大半は竈からの流れたもので4，5層は住居跡のものと思われる。粘性、締まりは弱い。

竈は北壁中央に位置し、遺存状態は良い。袖部はハの字状に包み込む感じで造られていた。煙道部、火床部とも良好な状態で検出され火床部はやや中程に位置し円形状でやや掘り込む。灰原は明確ではない。

床面は調査範囲では良好で、竈周辺は特に良い。東側隅部に焼土の塊が見られた。柱穴は、西側に一ヶ所認められた。掘り込みは深さ40cmを測る。

遺物は少なく（面積的にも小さい）甕、盤、坏、土製支脚等がみられた。いずれも西北の隅部周辺にまとまって出土している。図示したものはいずれも床直、及び近い出土状態。1は土師器中型の甕で、胴部は弱く張り球形状で頚部は「く」の字状で短く外反し口唇部は三角形に短く立つ。ナデ調整がなされている。周溝から出土している。2，3は甕の近くから出土した平底と高台付き坏で2は体部は強く外反し口唇部は丸く治め開き気味。3は器肉が薄く直立気味で口唇部は尖り気味。高台は直立気味で短い。いずれも轆轤成形である。4は口径20.2mmほどの盤で脚部は短く体部と底の境目に付けられている。口縁部は開き気味。5は土製丸玉で一部欠、重さ3g。6は土製支脚でほぼ完存し三角形形態をもち長さ15.3mmを測る。7は鉄族で茎部分を欠失している。現存7，8cm錆化が進む。時期は奈良時代末。

7　7号，8号住居跡（第8図）

本住居跡は、4号住居跡の東側に検出された住居跡で北側を戦後の溝と現在の道路によって攪乱、エリア外になっている。主軸をN－30°－Wに置き東西4.3mを測る。南北方向では前述の様に2，3号溝よって攪乱、又、道路によって不明。掘り込み深さは40～50cmを測る。壁面立ち上がりは垂直に近い。

覆土は7層に分けられた。確認面では暗褐色、下部、床面では褐色で、層序は自然埋積を示す。粘性、締まりは弱い。竈は北壁に存在すると推察されるが、前述の様に確認出来なかった。床面は、攪乱部（甘藷貯蔵穴）を除いて良く締まっていた。壁面部にはやや幅広な周溝が巡っている。攪乱部を避けて柱穴が二基検出され円形状で径40cm前後、60cm程の深さに掘り込んでいる。形態的にはU字状の掘り込み。

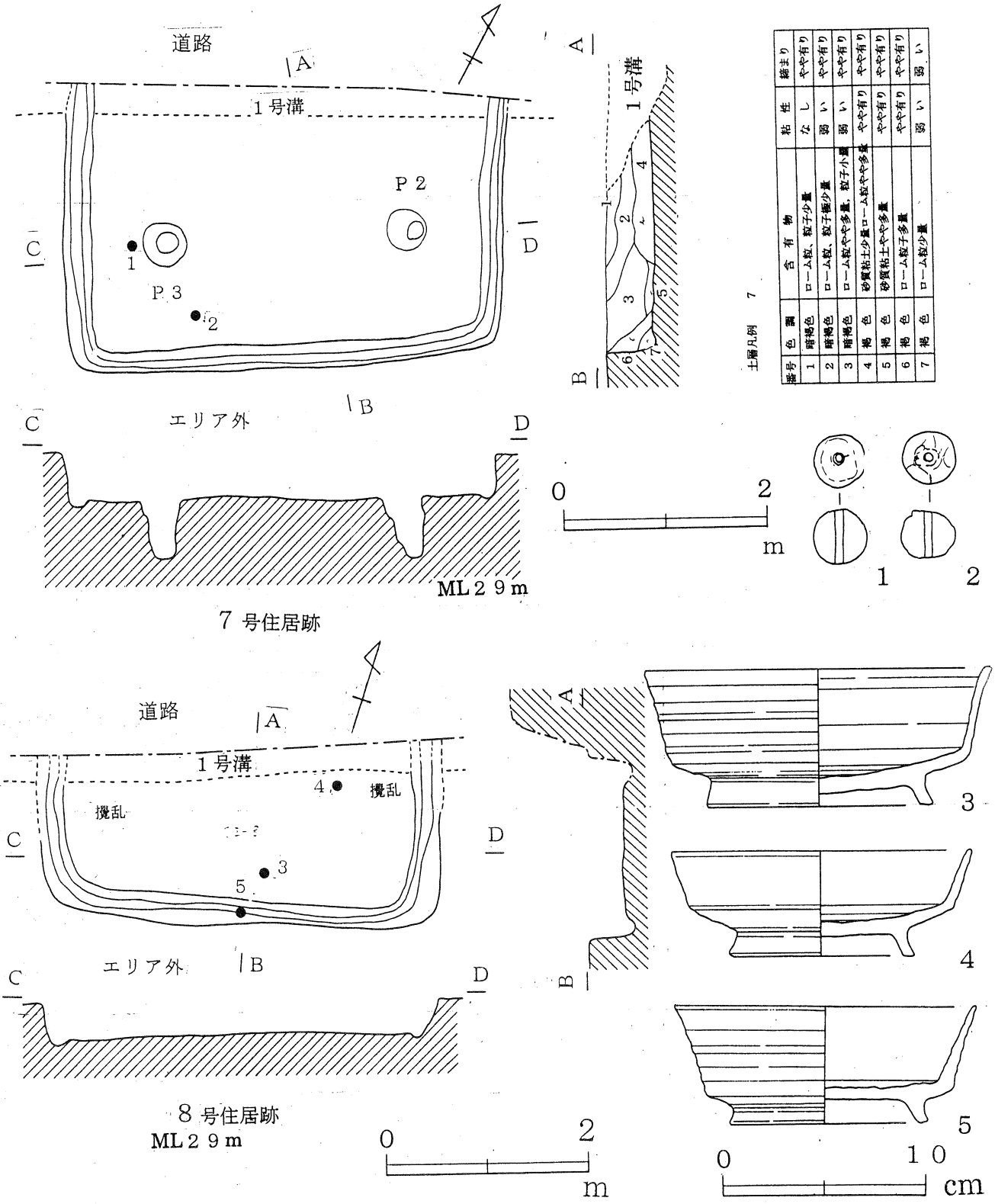
出土遺物は、図示した土製丸玉二個が見られたが土器では図示できるものはなかった。

8号住居跡は7号住居跡の東側に近接して検出された。7号同様北側を2，3号溝、道路によって攪乱、未掘区になり全容は把握出来なかった。主軸をN－15°－Wに置き、掘り込み深さは30～35cm前後を測り、壁面立ち上がりはやや傾斜をもつ。

覆土は4層程認められ、確認面は暗褐色、ほぼ7号住居跡同様で自然埋積が推察される。粘性、締まりも同様なものであった。竈もエリア外に位置していると推察され不明。

床面は、甘藷貯蔵穴が二箇所見られた。その他は比較的締まりは良い。壁面に沿って周溝が検出された。柱穴は攪乱（甘藷貯蔵穴）のため確認出来なかった。

出土遺物は少なかったが、図示した須恵器高台坏が周溝部、床面から出土した。いずれの高台



第８図　７，８号住居跡と出土遺物実測図

も短く「ハ」の字状に開く。端部はカット状である。１の体部は器肉が薄く立ち上がりは弱く開く、深さは９ｃｍ程を測り口径も１７ｃｍと大型である。２の体部は開いて立ち上がり口唇部は尖り気味で３ｃｍと浅く口径も１５ｃｍと一段小ぶりの形態である。３は、高台が端部に位置し体部は開きながら器肉を減じ口唇部は尖る。底部は平坦である。いずれも轆轤成形で４を除き成形痕を顕著に残す。４はナデ調整が施されて轆轤痕は明瞭ではない。

時期は出土須恵器高台の器形から、７号よりやや新しい平安時代初頭が推定される。

８　９号住居跡（第９図）

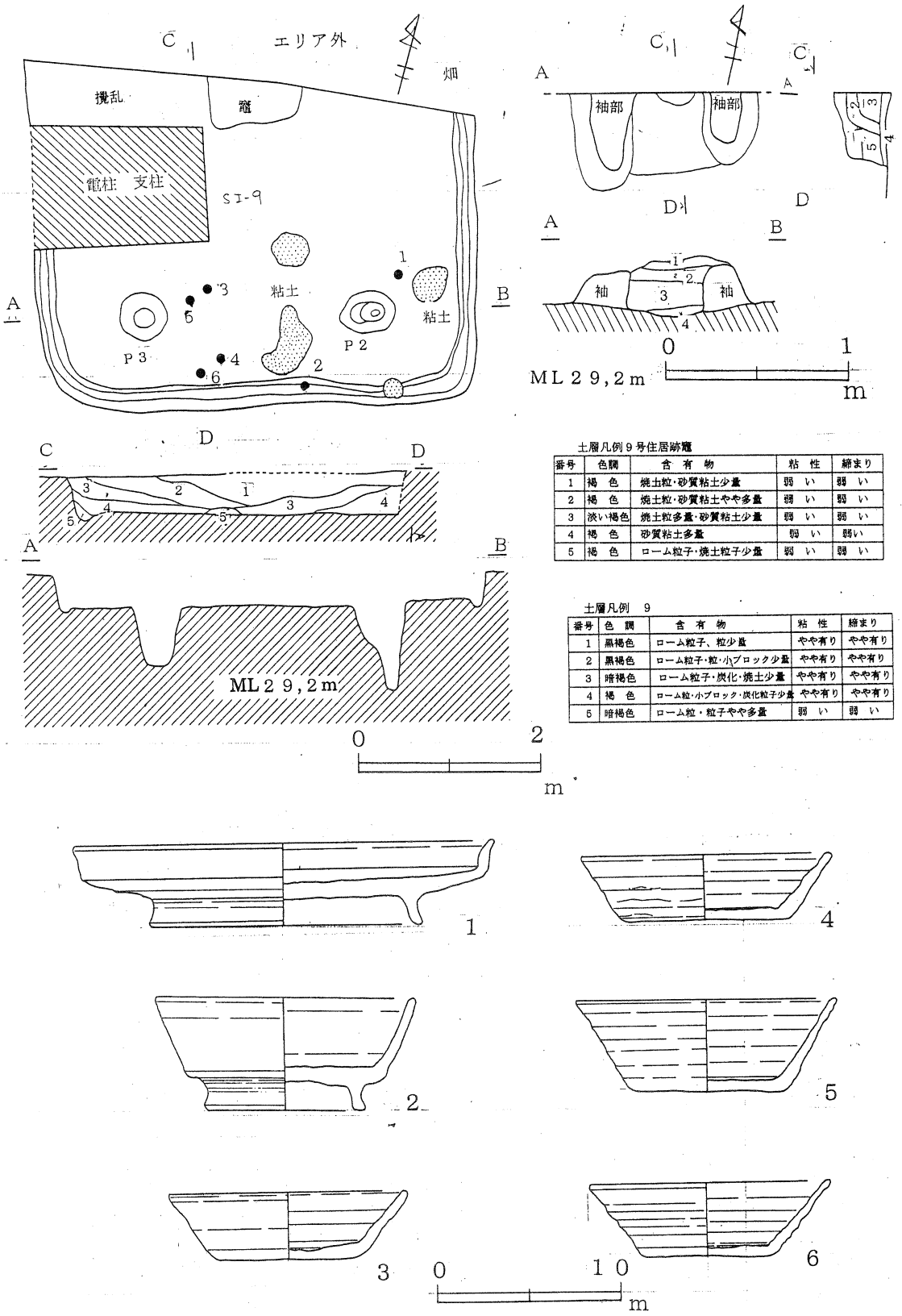
本住居跡は現道路北側に位置し、東側になだらかに傾斜を示している。北側は調査区外に位置し竈は一部が調査されたに過ぎず、また中央西側には電話線控えのコンクリートが存在し、調査に制約を受けた。主軸をＮ－１７°－Ｗに置き東西４.７ｍを測る。主軸方向は未掘のため不明であるが、西側の調査範囲からほぼ同様な長さと思われる。所謂方形プランが推察される。掘り込み深さは東側で３０ｃｍ、西側で４０ｃｍを測り、壁面はやや開き気味。

覆土は５層に分けられ確認面では黒褐色を呈していた。層序からは自然埋積が考えられる。各層とも粘性、締まりはややある。床面近くには白色の粘土塊が三箇所ほど散在して認められた。

竈は袖の部分のみの調査で全容は把握出来なかった。調査部分から推察すると直線的な袖を持つ形態と思われる。火床部が僅かに覗いていた。灰原は竈前面に僅かに認められた。

床面はほぼ平坦であったが中央部、竈前面、以外は総じて締まりは悪い。ほぼ平坦に推移していた。周溝は調査範囲では幅広で深めに検出された。柱穴は二箇所検出され円形、楕円形状と分かれる。掘り込みも二段に掘り込む２と円形状からＵ字状に掘り込む３とがある。掘り込みは９５ｃｍと６０ｃｍと深さに差異が見られる。使用柱の相違からか。

出土遺物は、須恵器が多数を占めた。図示したものは総べて須恵器で盤は口径２３ｃｍを測る。体部は直立気味に立ち口唇部のみ開く。高台部は、やや内側に位置し弱く張る。ナデ調整が施されている。２は、碗状器形で体部は外反しながら立ち上がり口唇部は内側にカット状、高台はやや端に位置し直立気味。轆轤成形でナデ調整。３からは平底で口径は１３.５乃至１４ｃｍ前後で深さは５がさも深く５ｃｍ、４ｃｍ、３.５ｃｍと三段階になる。器形はいずれも外反しながら立ち上がり器肉を減じる５，６が見られる。轆轤成形で一部にナデ調整も見られる。時期は須恵器の形態等から平安時代初頭～前半が考えられる。須恵器底部はナデ調整が多い。



土層凡例 9 号住居跡竈

番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	褐色	焼土粒・砂質粘土少量	弱い	弱い
2	褐色	焼土粒・砂質粘土やや多量	弱い	弱い
3	淡い褐色	焼土粒多量・砂質粘土少量	弱い	弱い
4	褐色	砂質粘土多量	弱い	弱い
5	褐色	ローム粒子・焼土粒子少量	弱い	弱い

土層凡例 9

番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	黒褐色	ローム粒子、粒少量	やや有り	やや有り
2	黒褐色	ローム粒子・粒・小ブロック少量	やや有り	やや有り
3	暗褐色	ローム粒子・炭化・焼土少量	やや有り	やや有り
4	褐色	ローム粒・小ブロック・炭化粒子少量	やや有り	やや有り
5	暗褐色	ローム粒・粒子やや多量	弱い	弱い

第９図　９号住居跡と出土遺物実測図

９　１０，１１，１２，１３号住居跡（第１０図）

１０，１１，１２，１３号住居跡は道路北側に位置し、ほぼ並列している。１号住居跡の西側に検出された遺構群である。いずれも調査範囲が狭いため遺構確認状態範囲の調査であった。

１０号住居跡

本住居跡は遺構の南側部分のみで、東西２.８ｍと小型の遺構で主軸はＮ－５２°－Ｗに置くと思われる。掘り込みは５０ｃｍを測りやや深い。壁面は開き気味に立ち上がる。

覆土は、確認面で暗褐色、褐色で粘性、締まりは弱い。層序、堆積状態からは自然埋積が推察される。竈は前述の様にエリア外に大部分位置し確認出来ない。プラン等から東壁乃至北壁に位置するものと思われる。遺物は、図示した１，２が主な物で１は土師器碗で体部は器肉を減じて立ち上がり外反する。口唇部は尖り気味、口径１４.１ｃｍ。高台はやや端部に位置し、短く角張る。轆轤成形で高台部分にナデが見られ内黒。２は刀子状の鉄製品で刃部先端は欠失している。遺存長６.５ｃｍ、刃部長４.５ｃｍである。錆化が進行している。

１１号住居跡

本住居跡は、１０号住居跡の南側に位置し電話柱と現道路の為竈部分のみの調査であった。依って竈の断面図と平面のみの図示である。層序は図示した様に８層に分けられた。確認面では砂質粘土、赤褐色の煙道部等が認められていた。土層中央には赤褐色の火床部が見られ煙道部に続く状態が観察される。平面図からは円形状のプランの竈と推察される。遺物は３の手づくね土器が砂質粘土の中から出土している。

１２号住居跡

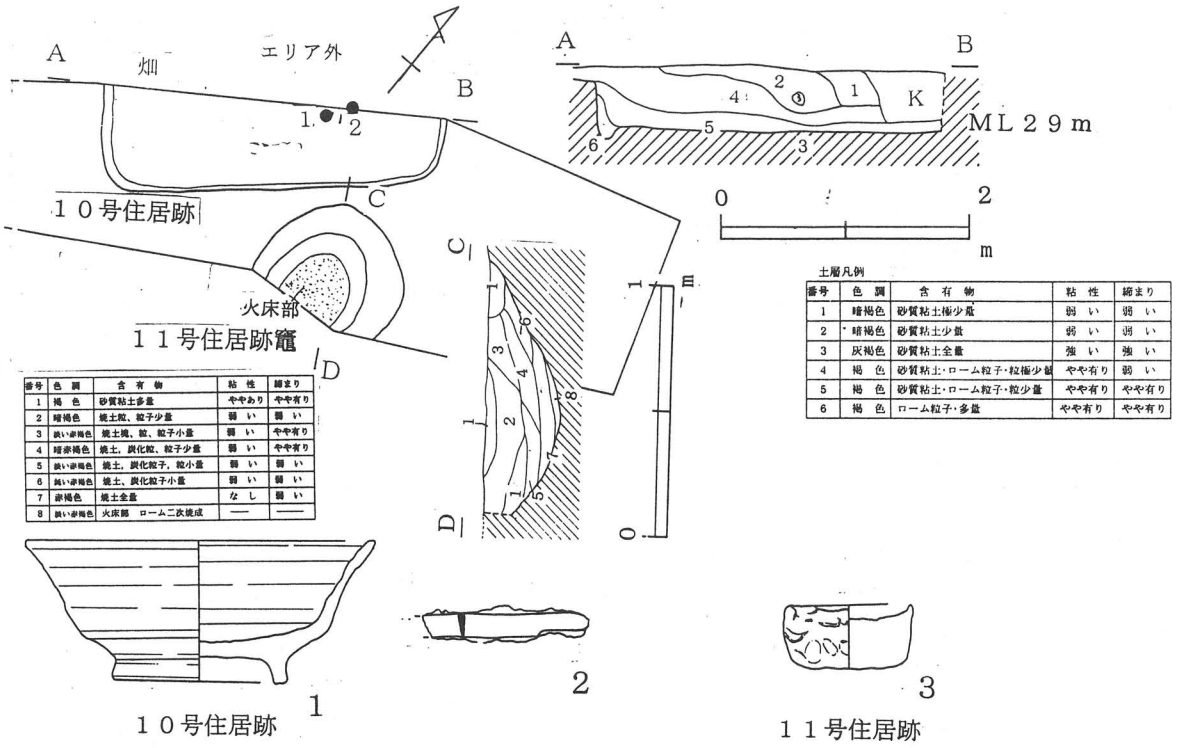
本住居跡は、１０号住居跡の西側３ｍに位置して検出された。南側は現道路、北側はエリア外に位置し調査出来たのはピットの位置関係から住居跡中央部南側の一部と推察される。主軸は不明であるが、検出された壁面方向からＷ方角にかなり大きく振れると推察できる。
東西で約７ｍを測り、かなり大型の遺構と推定できる。壁面は直立気味で、掘り込みは６０ｃｍを測る。柱穴は２ヵ所確認され楕円形状で径５０～６０ｃｍ、掘り込みは４０～５０ｃｍU字状の掘り方である。西側のピット周辺には円形状の小穴が連続して掘られていた。

覆土は図示しないが５層にわけられた。層序は、レンズ状のほぼ自然堆積が認められる。

竈は未検出。床面はほぼ平坦、締まりは良い。壁面部には幅広で深めの周溝が認められる。遺物は図示した４，５，６が出土している。口径１４ｃｍを測る小型の甕は頚部はくの字状を呈し口唇部は水平に近く開く。胴部は球形状に近い。やや古手。外面はナデ、内面は刷毛調整が見られる。５は６０％ほど残存する須恵器坏で器形は、平底から器肉を減じながら外反して立ち上あがる。内面は轆轤痕を残すが外面はナデ調整が施されている。口径１３.５ｃｍ高さ３.７ｃｍを測る。６は鋤の片側か、鉄製の刃部をもち片側には木製の物をくい込ませたて様にＶ字状を呈する。現長は１０.５ｃｍである。調査区中では最大の規模をもつ住居跡で、時期は奈良時代末か。

１３号住居跡

本住居跡は、１２号住居跡の西側に１ｍに近時して検出された。本跡も１２号住居跡同様南側を現道路、北側を畑のエリア外に位置し調査部分は極一部であった。掘り込みは４０ｃｍ深い。床面は二色に分かれ複合の可能性が窺える。遺物は図示出来る程のものは無い。



土層凡例

番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	暗褐色	砂質粘土極少量	弱い	弱い
2	暗褐色	砂質粘土少量	弱い	弱い
3	灰褐色	砂質粘土全量	強い	強い
4	褐色	砂質粘土・ローム粒子・粒極少量	やや有り	弱い
5	褐色	砂質粘土・ローム粒子・粒少量	やや有り	やや有り
6	褐色	ローム粒子・多量	やや有り	やや有り

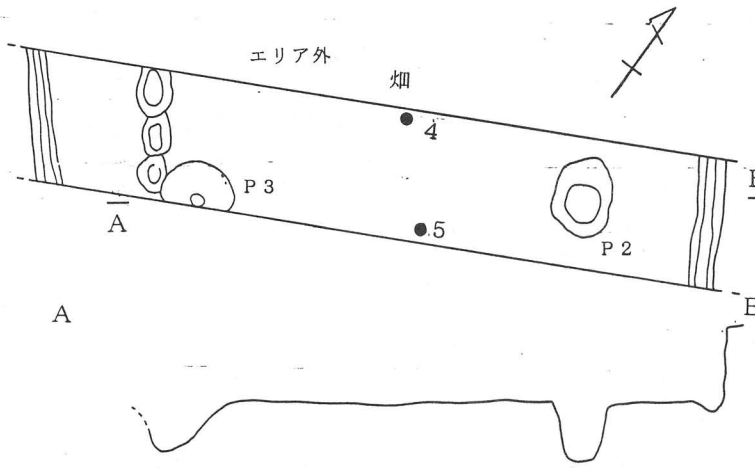
番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	褐色	砂質粘土多量	ややあり	やや有り
2	暗褐色	焼土粒、粒子少量	弱い	弱い
3	淡い赤褐色	焼土塊、粒、粒子小量	弱い	やや有り
4	暗赤褐色	焼土、炭化粒、粒子少量	弱い	やや有り
5	淡い赤褐色	焼土、炭化粒子、粒小量	弱い	弱い
6	淡い赤褐色	焼土、炭化粒子小量	弱い	弱い
7	赤褐色	焼土全量	なし	弱い
8	淡い赤褐色	火床部　ローム二次焼成	—	—

１０号住居跡　1

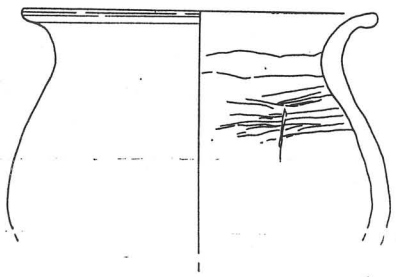
2

3

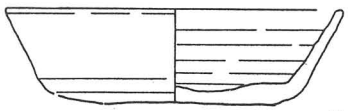
１１号住居跡



１２号住居跡

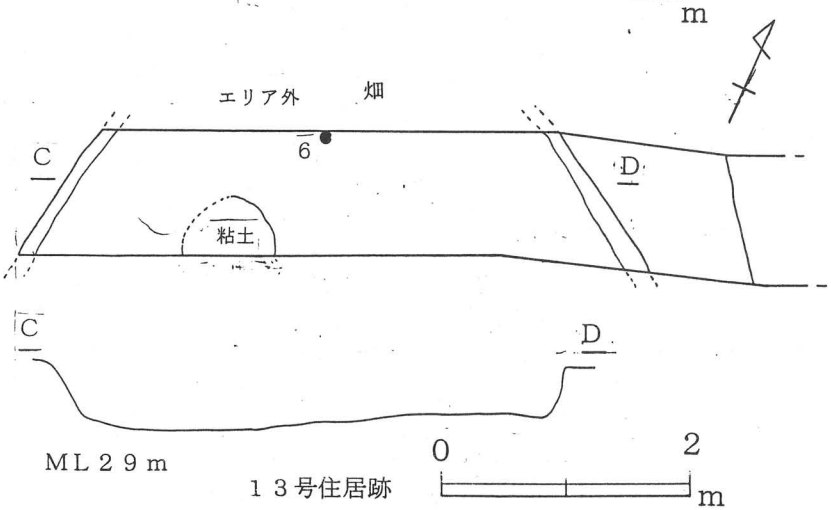


4



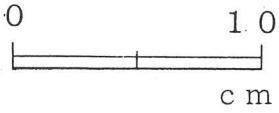
5

１２号住居跡



１３号住居跡

6



第１０図　１０，１１，１２，１３号住居跡と出土遺物実測図

V　土　坑

本調査区では４基の土坑が検出された。規模プランともそれぞれに差が見られた。

１　１号土坑（第１１図）

本土坑は道路北側の攪乱層の中に僅かに検出されたもので三角形状であり本来の形は不明。大半はエリア外の畑に位置すると思われる。確認面では黒色の土層で異色のものであった。遺物は皆無で時期等は不明。東側は甘藷の貯蔵穴、溝状の攪乱が入っていた。

２　２号土坑（第１１図）

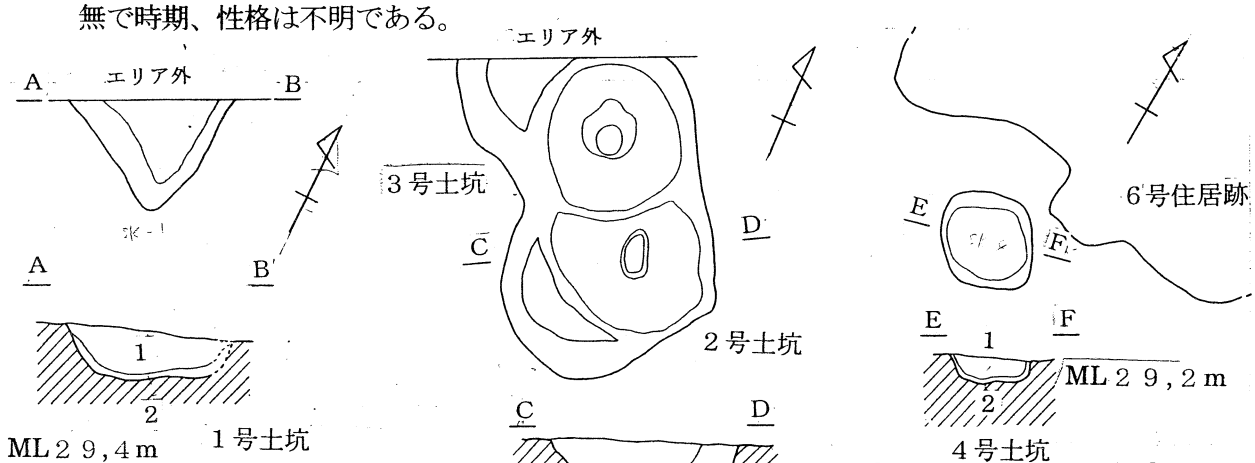
本土坑は、１号住居跡の東側に位置して検出された遺構である。確認面でセメント瓦の一部が検出されたが、プランが大きいもので調査を行った。上端径３ｍの円形状プランで２基連続して営まれた甘藷貯蔵穴と推定される大穴であった。掘り込みは１ｍと深く、底部中央部に長円、楕円の水抜きと思われる小穴が穿たれていた。今日まで多くの調査を行ってきたがこの手のプランを持つ甘藷穴は長年の調査でも検出されなかった。右側の中段に足場が認められる独特の掘り込み、本地域では類例はない。セメント瓦から戦後の遺構と思われる。

３　３号土坑（第１１図）

本土坑は、２号土坑と切り合い同形、同種のもので規模、プランも差異は少ない。土層は３層に分けたがロームブロックの量の差で締まり粘性、色調等に特別な差はない。３はロームブロック層である。遺物はコンクリート瓦の破片が認められ２同様の時期が推察される。

４　４号土坑（第１１図）

本土坑は６号住居跡の北側に検出された方形状の遺構である。一辺約６０ｃｍ程のプランを有し掘り込みは１５ｃｍと浅い。壁面はだれた立ち上がりを示し底面も凹凸気味である。覆土は２層に分けられた。確認面では黒色、下部は黒褐色で締まり、粘性は弱い。遺物は皆無で時期、性格は不明である。



土層凡例　SK－1

番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	黒色	黒色土全量	強い	強い
2	暗褐色	ブロック・ローム粒子少量	やや有り	やや有り

土層凡例　SK－2

番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	黒褐色	ロームブロック少量	やや有り	やや有り
2	黒褐色	ローム粒・ブロック極少量	なし	なし
3	褐色	ロームブロック多量	弱い	弱い

土層凡例　2

番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	黒色	黒色粒少量	弱い	弱い
2	黒褐色	ローム粒子少量	弱い	弱い

第１１図　１，２，３，４号土坑実測図

VI　溝

本調査区からは４条の溝、「道」状遺構が検出された。

１　１号溝（第１２図）

本溝は、３号住居跡の中から検出されたもので北側は道路、南側は畑の為住居跡の範囲のみの調査である。長さ３.１ｍ、幅１.５ｍ程のもので掘り込みは緩いU字状形態の掘り込みである。

覆土は投げ込み的感じで４層に分けられたが１層は凡て溝の層序で黒褐色である。２層からは土坑状の感じでローム多量の黄褐色、３層は黒褐色の繰返しであり、粘性締まりはない。

遺物は常滑焼き水瓶の一部、小破片が２点出土している。遺物からは江戸時代以降の遺構と推察される。

２　２，３号溝（第１２図）

本遺構は、７，８号住居跡の北側に検出され西側に続く溝で２号溝は道路に沿って西側に続く、３号溝は道路下に入り込み不明。いずれもセメント瓦の破片が出土する溝で近世の溝、道状の遺構と推察するが、覆土の締まりは弱い。

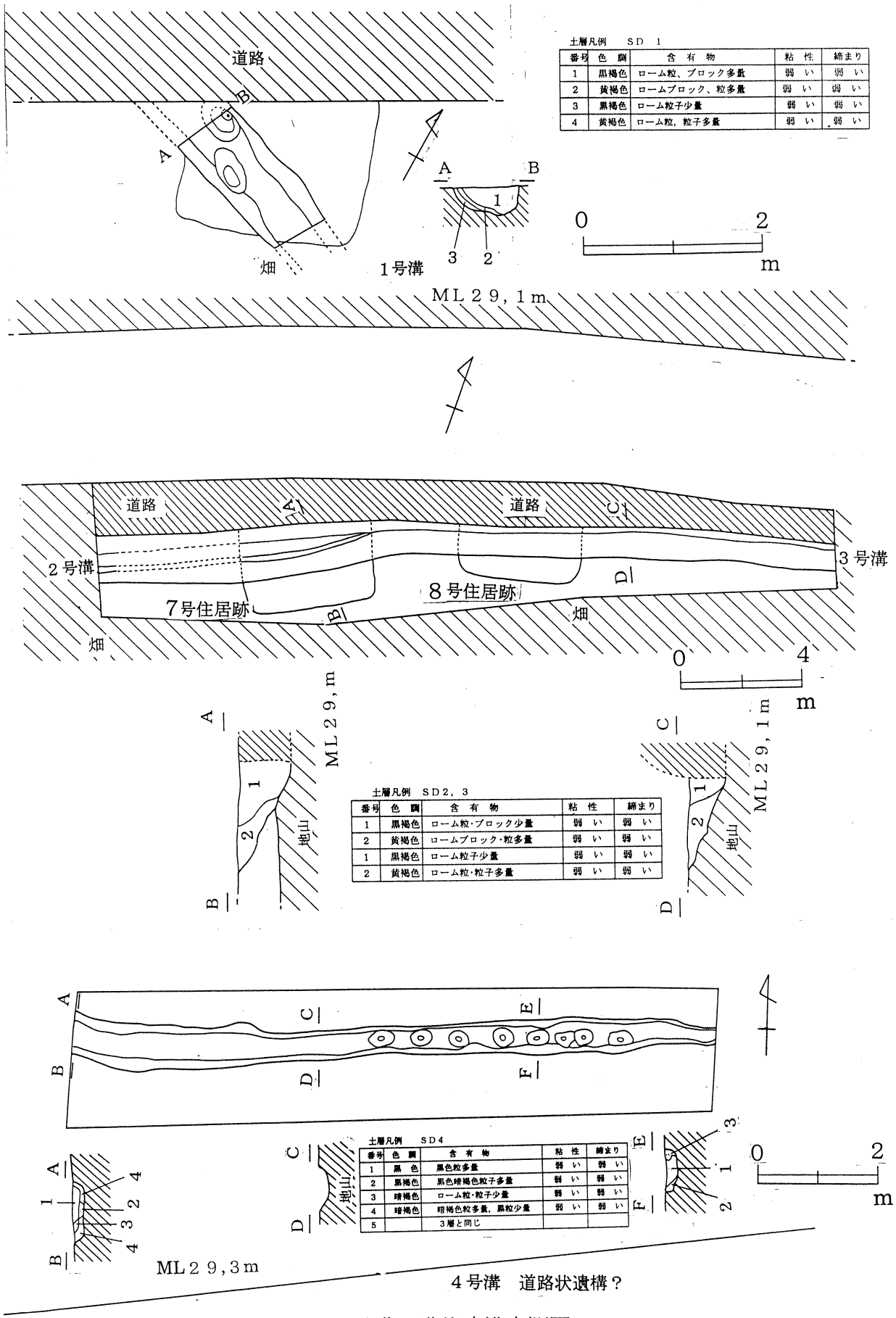
覆土は褐色で粘性、締まりは弱い。性格は不明。以前は道か。出土した瓦から戦後に埋没したと考える。

２号溝も同様であるが方向は調査区に平行して西に１０ｍ程伸びてから道路下に入り込む。時期は３号溝が２号溝を掘り込む。いずれも昭和期の遺構と思われる。

３　４号溝状遺構（第１２図）

本溝は、道路北側に位置して検出されたもので前回の平成４年の調査で道路跡として報告された延長部で今回の調査では『道』とは断定出来なかった。長さは１０.６ｍほどの長さで確認された。幅は最大８０ｃｍ、最小幅４０ｃｍと振幅がある。所々に黒色の粒の小穴が認められた。

前回の調査の２号道状遺構に接続するものである。一部硬質部分もあり『道』も否定は出来ないが断定も難しい遺構である。遺物も皆無に近い。



第１２図　１，２，３，４号溝、溝状遺構実測図

Ⅶ 総 括

本調査区域は、現道路の左右に分かれ多くの遺構が畑、道路のエリア外に位置し完掘出来た遺構は僅かに住居跡１軒であった。以下検出された住居跡の特徴と遺物を総括し結びにかえたい。

検出された住居跡は１３軒で、切り合い関係は無く、いずれも単独であった。しかし道路の調査と言う宿命で完掘出来たものは１軒のみであった。これらの主軸はすべてW－方角に１０～３０° 前後の振れが見られE―方角のものは１号住居跡の造り替えのみであった。

竈が検出された住居跡は４軒であったが、他の８軒も存在が推察できる。１号住居跡は北側に廃棄された竈を持ち東側に廃絶直前まで使用していた竈が検出された。６号住居跡は竈側の小面積の調査であったが本体の遺存状態は良好であった。９号住居跡では袖部のみの検出である。形態的には袖部を直線的に延ばすものとハの字状のものが見られた。これらは特別に大きな時間的な差はない。用材としての砂質粘土も１号住居跡東側において省略が認められたが粘土に差異は無かった。

出土土器甕の形態では胴部に張りを持つものものから、長胴形へと変化し大型から小型の器肉の薄い粗雑な器形に変化している。

坏は土師器、須恵器を問わず高台付と平底の二種類認められた。口径は１４ｃｍ前後と一定しているが底部の径には差が認められる。器形自体は体部が器肉を減じて開いて立ち上がるものと一定の厚みを持つものに分かれた。これらは土師器、須恵器に共通していた。４号住居跡出土の碗状の土師器は時間的に差があり一時期前のものであり、１２号住居跡の坏も同様である。

坏蓋は天井部に膨らみを持つものとやや扁平な物が３号住居跡から出土している。宝珠形の摘みも同様に膨らみを持つものと扁平とに分かれ、カエリ部も長短に分かれた。これらは時期に小差が認められるが混在していたと考えられる。

台付き皿は二点検出され台部の長短、端部の開きに相違が認められる。いずれも土師器であった。

盤型土器は２点確認された。６号住居跡出土のものと９号出土では皿部の口径、開きに差が見られこれも時間的差と推察される。大差ではない。これらの出土土器はすでに専門集団、在地「釜」の存在が肯定できる焼き方である。霞ヶ浦町のみならず近隣にも釜は存在したと思われる。

地形的に浜地区から谷島、八木蒔、羽生、沖洲の台地に可能性は高いと思われる。

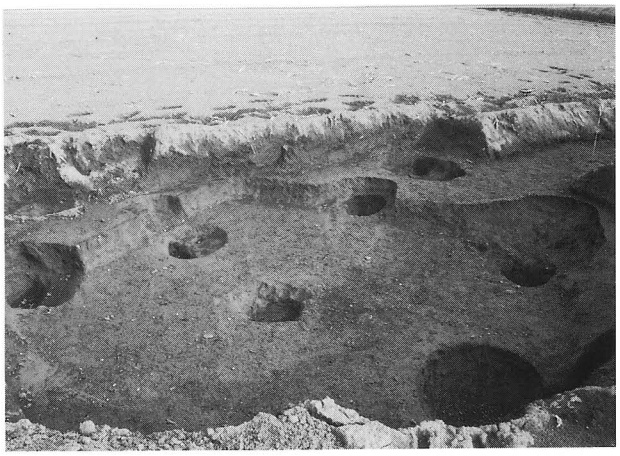
土製支脚は二点検出された。いずれも三角形状形態を持つと思われる。

鉄製品は刀子、鋤状、鉄族状の三点が出土している。いずれも錆化が進行し遺存状態は余り良好では無い。

遺物から、本集落は八世紀から九世紀前半にかけて営まれた集落の一部と考えられるが、現道路の左右と言う変則的な調査であったことが悔やまれる。

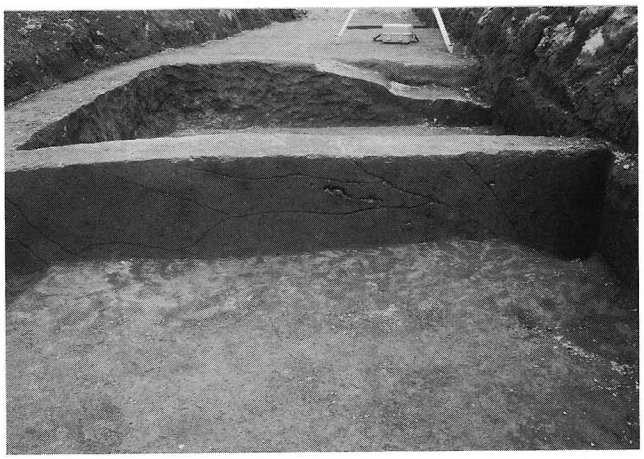
ほぼ、水田耕作主体に変化する体制の中で、奈良時代から平安時代にかけて短い時間ながら、台地中央部に集落が存在している事は今後の調査と本時代の政治と社会体制を理解するうえで欠く事の出来ない遺跡と考えられる。

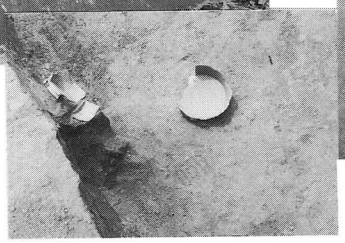
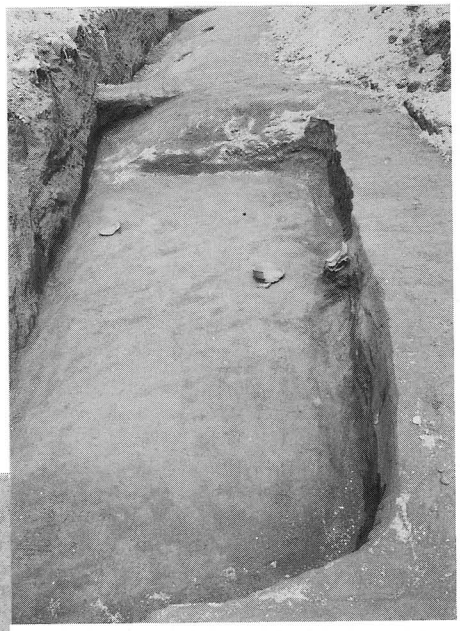
PL－1　調査前　左上　遺構確認　右、右中　一号住遺物　中左、下　遺物　完掘



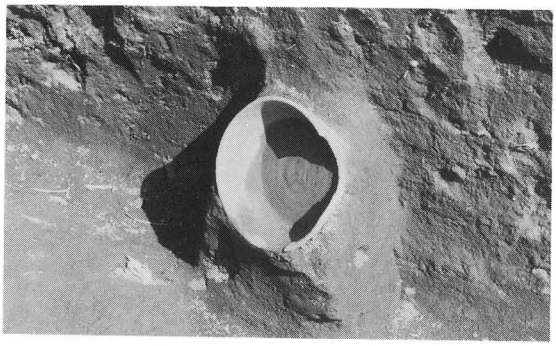
PL－2　2号住居跡と3号住居跡

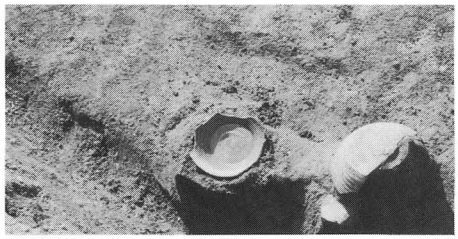
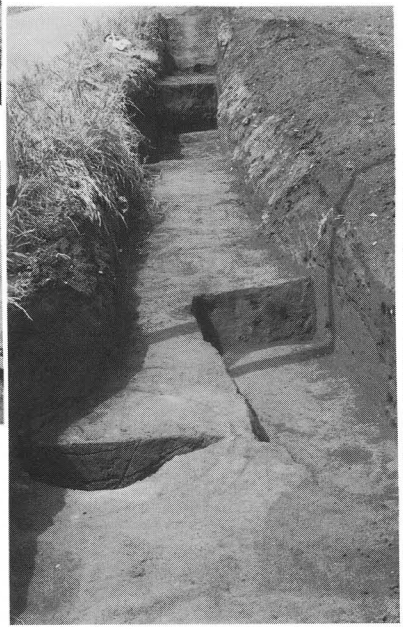
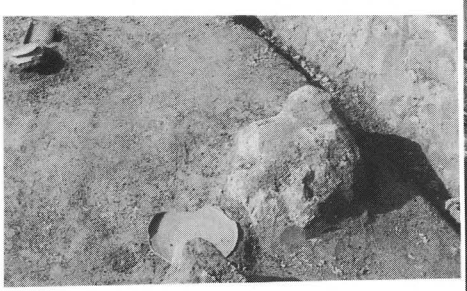
PL－3　4号住居跡　6号住居跡



PL－4　7、8、9号住居跡



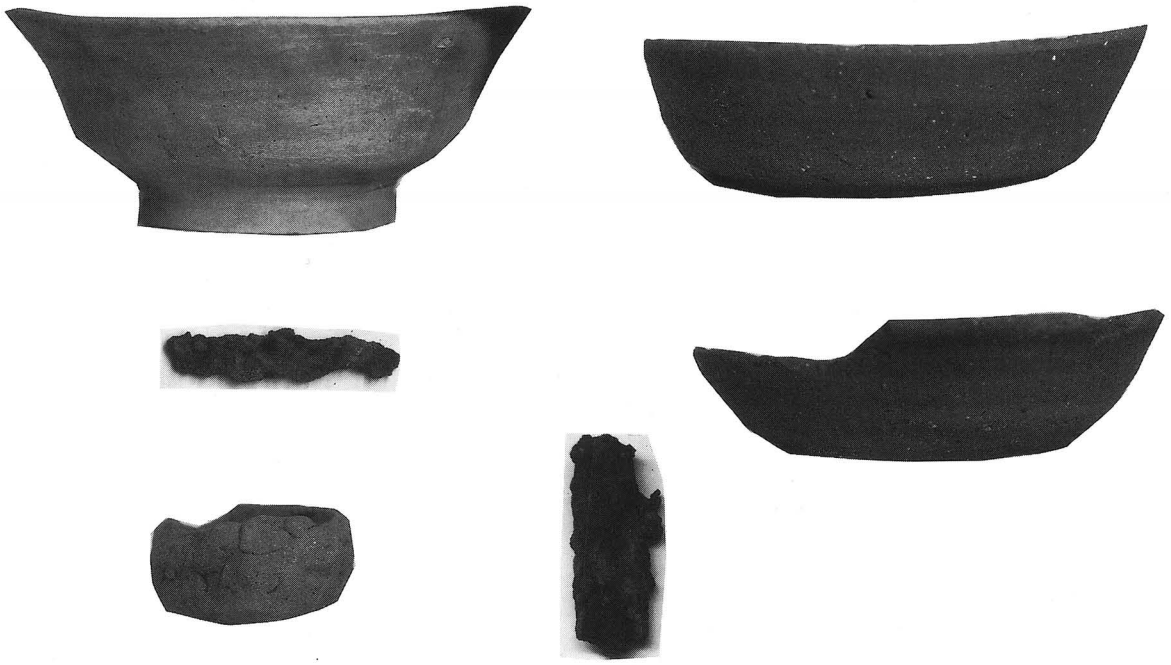




PL－5　9号住居跡、11号住居跡、12号住居跡、13号住居跡

PL－6　1号溝　2号溝　3号溝　4号溝道路状遺構

PL－7　出土遺物　1、3、4号住居跡

PL－8　出土遺物　6、7、9号住居跡



PL－9　10、11、12号住出土遺物

小池平遺跡発掘調査報告書

印　刷　　２００３年１２月２５日
発　行　　２００３年１２月２５日

編　集　　鹿行文化研究所
発　行　　玉造町遺跡調査会
　　玉造町教育委員会

印刷所　　（株）さんゆう社印刷